

「障がい者」、「福祉」を超える農にかかるとる取組み

～ NPO共働学舎と農事組合法人共働学舎^{しんとく}新得農場を事例に ～

調査研究部 濱田 健司

本報告では、さまざまな施設での受け入れが困難な人々を受け入れ、多くの人々が共に、生活する場、そして働く場をつくり出してきた「新得共働学舎」の取組みについて紹介する。農業生産、加工、開発、販売を行い、個人そして法人としての自立をはかっている。自分でやりたいことを探し出し、一人一人が役割を見出し、家事・仕事において分担・分業している。心や体に問題を抱えた人々が農の取組みを通じて自立し、自己実現をはかっている。ここでは「障がい者」「福祉」という言葉があてはまらない取組みが行われている。

1. 地域および法人概要

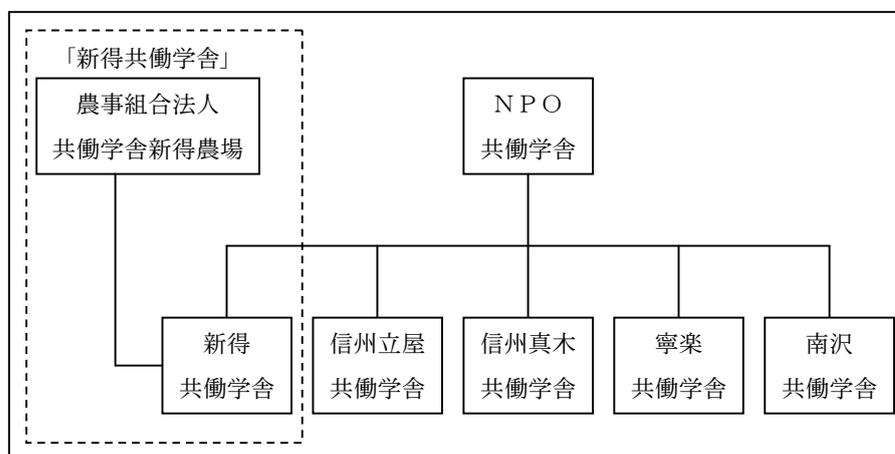
(1) 地域概要

「新得共働学舎」は北海道新得町にある。新得町は、人口6,780人（平成21年3月末）、面積1,063.8km²で（東京都の面積の約半分に及ぶ）、帯広市から自動車です0分位のところにあり、北海道のほぼ中央に位置する。総面積の約90%が森林、そのうち83,690haが国有林で、さらにその2/3が大雪山国立公園に指定されている。年間平均気温は6.7度、十勝地方では新得町だけが「特別豪雪地帯」の指定を受けている。

主な産業は農業であるが、ソバの生産量は年間145.6t、作付面積は140ha（20年度）で、日本一である。また、全国最大の1,662haの牧草地を有する「北海道立畜産試験場」がある（新得町ホームページによる）。



図1. 組織概要



(2) 法人概要

「新得共働学舎」は、NPO共働学舎（新得共働学舎）と農事組合法人共働学舎新得農場からなる（以下、両方をあわせて「新得共働学舎」とする）。

NPO新得共働学舎は主として生活の場、農事組合法人共働学舎新得農場は農業生産、加工、販売の場となっている。

「新得共働学舎」はさまざまな問題を抱えた人々が集まる。行政用語でいう知的障害者・精神障害者・身体障害者や触法障害者^{注1)}・引きこもり・不登校児・ニートなどである。他にその人々と共に生活する職員・ボランティアなどがある。また、海外からの留学生やボランティアも受け入れている。

農業生産、チーズ等の商品生産・販売、食の自給自足、学舎内の建物・道路等の建築などを行っている。

敷地内の共同住宅で共同生活し農作業等に従事する者、町営住宅などから通い共に農作業等に従事する者に分かれる。「新得共働学舎」では健常者と障がい者という区別はない。すべての人々が一個の人間として認め合っている。

日々の暮らし、生産をそれぞれが自ら決定し、「やりたいこと」に取り組む。その中で、家事・仕事の分担・分業が成り立ち、生活および生産が営まれている。

また、「新得共働学舎」は補助金などに依存せず、社会において自立した経営・組織



図2. 学舎の立地する傾斜地



図3. 学舎の最初の共同住宅、食堂

として運営されている。

注1) 触法障害者は、犯罪経歴のある精神障害者や知的障害者などをいう。

(3) 一日の活動

早い者は朝4時から作業を行う。7時半より8時15分まで食堂に集まり朝食をとる。8時15分より食堂で全体ミーティング、ここではそれぞれが「今日は何をやりたのか」を発表し、一日の作業の分担や流れが決まる。8時半よりそれぞれが作業に従事する。「新得共働学舎」では基本的に、起床時間や作業開始時間や作業終了時間、そして作業をする、しないは本人の自主性に任せている。したがって「やりたくない」「できない」者がいれば他の者が代わって行うか、他の者ができるように作業内容や工程等を工夫する。12時より14時までは休憩とし、14時から17時位まで作業する。19時より19時半まで夕食をとり、19時半より全体ミーティングがあり、「今日は何をしたか」をそれぞれが報告する。

就寝時間や遊びの時間などは自由となっている（通常の福祉施設ではあまり見られない）。生活時間および労働時間については全体でバランスをとりながらお互いに自主性を尊重し調整する。

原則として日曜は休日としているが、家畜の世話や、売店・レストランでサービス

を提供する者は交替制となっている。

つまり、「新得共働学舎」では「何もやらない」「休む」「遊ぶ」「働く」こと、そして活動内容、時間配分は共同生活者自身に任せている。ただし、共に暮らす者として、家事・仕事の責任を果たすことが要求される。

(4) 構成員

メンバーの多くが北海道出身者であり、20代から50代の職員（6～7名）、ボランティア（5～8名）、パート（7～8名）を含め約60名程度がさまざまな活動に取り組んでいる。精神・知的・身体の問題を抱える者、ニート、引きこもりだけでなく、留学生、職員、ボランティア、パートも共同生活、共同生産を行う。「新得共働学舎」内で生活するのは5家族（うち1家族は親子）、通ってくるのは5家族で、親子、夫婦、兄弟でかかわっており、それ以外の者は独身者となっている。

2. 取組みの経緯

宮嶋望理事長（以下、宮嶋氏とする）には、東京の私学・自由学園^{注2)}の教員であった父（宮嶋真一郎氏、以下、父とする）がいる。父は「誰でも学びそして自立できる場をつくりたい」という理念のもと、長野県に最初の共働学舎^{注3)}を開設した。宮嶋氏は、自由学園を卒業後、アメリカのウィスコンシン州の農場に修行へ出た。2年の実習のあと、大学へ編入し、アルバイトをしながら勉強をして卒業した。アメリカの農産物は戦略物資であること、日本は真似ができないほどの大規模であること、アメリカでも環境に負荷を与える農業生産方法では持続的な農業は難しいということを学んだ。

4年間の渡米後、昭和53年に日本に戻り（当時27歳）、父から北海道の新得町で「新得共働

学舎」を設立してはどうかという提案があった。

当時、新得町の職員が長野の共働学舎に研修へ来ていたこと、そして町長がその理念に深く賛同していたことから、新得町から町有地30haの無償貸与の申し出があり、同町への開設が決まった。

5つの共働学舎は、当初、任意団体や農事組合法人として活動していたが、平成17年に任意団体からNPOとなった。NPOとした契機は、共働学舎新得農場においてチーズで高収益があがるようになったためである。税務署から、任意団体としての税務上の問題を指摘され、組織・体制を整備することとなった。現在は、NPOから農事組合法人へ人材を派遣し、農事組合法人が農業生産やチーズ等の加工・販売などの収益事業を行う形態をとっている。なお、7～8名が、NPOおよび農事組合法人の事務等スタッフとして兼務している。

宮嶋氏は経営の自立をはかるため、平成3年に牛舎、搾乳室、チーズ工房を建設するために1億1,200万円の投資を行った。なお、共働学舎から1,100万円、農業関連の資金5,700万円を借り入れた（現在はいずれも完済）。NPO設立数年後には自立経営を実現している。生産・開発・加工・販売の多大な努力が実り、詳細は後述するが、生産したチーズが世界各国で賞を受賞するようになり、商品として高い評価を受けるようになったことで、自立経営を実現した。

注2) 大正10年にジャーナリストの羽仁吉一・もと子夫妻が設立した、キリスト教精神にもとづき「自由・協力・愛」を学ぶ、幼稚園から最高学部（大学）までを擁する総合学園。

注3) 共働学舎は宮嶋真一郎氏が長野県で昭和49年に設立し、現在までに長野県で2カ所、北海道で2カ所（新得共働学舎を含む）、東京で

1カ所の事業所を開設し、約120名が共に働き、生活している。

3. 事業と活動内容

(1) 農業生産

敷地面積は78.4ha、そのうち約43haが町有地（現在は借地料を支払っている）、約15haが借地、約20haを購入した。牧草地約38ha、放牧地約27ha、原野約12haとなっている。もともとの地目はほとんどが原野と畑地で、徐々に農地規模を拡大していった。現在、離農する近隣の農家より農地18haの購入依頼を受けており、さらなる規模拡大を検討している。

農薬、化学肥料を全く使わないバイオダイナミック農法^{注4)}による有機野菜生産の畑約3ha、その他は厩舎や住宅のスペース、道路、そして牧草地および原野となっている。

農業生産としては畜産生産と野菜生産が中心であり、乳牛120頭（うち育成牛約60頭）、肉牛5頭、母豚40頭・種豚1頭、鶏（鶏卵用）206羽、羊20頭を飼育している。

乳牛には12名、肉牛2名、豚2名、鶏4名、羊1名が従事している。野菜はボランティアの指導を受けながら12～15名程度が従事している。なお、乳牛・肉牛・鶏については他部門と兼務し、野菜については多くの者が手伝っている。



図4. 放牧されている乳牛



図5. 豚舎

牛の餌については2/3を自給している。鶏は平場で飼い、牛も豚も牧草地に放牧している。なお、近年、道と協力し、平成18年度から3カ年計画で牛の林間放牧地造成事業にも取り組んでいる。



図6. 床下に炭を敷き詰めた乳牛の厩舎

注4) シュタイナーが提唱した農法。農地は、木・森・湿地・川そして、家畜としての動物で構成される。農地では、家畜のえさも収穫し、家畜のふんを堆肥として利活用している。

(2) 加工、販売

加工については、農産物を加工し、チーズ・ソフトクリーム・クッキー・ケーキ・パン、フェルト人形や座布団などの生産を行っている。

昭和58年に、敷地内に町の全額補助により「新得町特産品加工研究センター」が建設された。これはある自閉症のメンバーが、

自分で1年間働いて貯めたお金全額（約15万円）を、自分の意志で「24時間テレビ 愛は地球を救う」に寄付したことが町長に伝わり、その感動がセンター建設のきっかけ



図7. 新得町特産品加工研究センター

となった。今日の「新得共働学舎」における開発・加工の大きな礎となった。

上記の加工品に加え、野菜などを施設内の交流センター「ミントル」において直売している。また、「ミントル」ではレストランとして、チーズやワインなどの飲食を楽しむこともできる。この他、チーズについてはインターネットやFAXでの注文販売を行っている。



図8. 販売、交流センター拠点「ミントル」

チーズは新得町から車で1時間ほど離れたところにある帯広市の飲食店街のワインバー、居酒屋など4軒のメニューとして並んでいる。また、東京の飲食店2店舗にも出荷している。

(3) チーズ工房

チーズ工房では、製造5名、包装・発送6名、販売2名が従事している。



図9. 自分たちで建てたチーズ貯蔵庫



図10. チーズ

チーズ生産では、弱みである傾斜地・寒冷地を活かすことで、そして効率的な生産が難しいといわれるさまざまな問題を抱える人々が、ゆっくりと丁寧な作業が要求される生産に従事することで、高い付加価値を創出している。

例えば、搾乳した牛乳は電動機械を用いて加工施設へ運ばれると、その過程で電位が失われ固めることが難しくなることから、一般的には塩化カルシウム等を添加しなければならない。だが、地形の傾斜（重力）を利用することで機械を使わずに運ぶことが可能となり、よりおいしいチーズの生産につながった。



図11. 手前がチーズ貯蔵庫、奥がチーズ加工所(奥からなだらかな斜面となっている)

(4) 世界各地のチーズコンテストで多数受賞

平成16年には第3回「山のチーズオリンピック (スイス)」で「さくら」が金賞とグランプリ、平成19年には「モンドセレクション」で「さくら」「笹ゆき」が最高金賞、平成20年には「モンドセレクション」で「笹ゆき」が金賞、「ラクレット」が銀賞を受賞している。平成16年以降、毎年国際大会で受賞し、国際的にも非常に高い評価を得ている。

「新得共働学舎」は、このようなチーズを生産できる事業者として、国内においても今後益々注目されるべき存在といえよう。

(5) 日常生活

敷地内の道路、食堂、宿舍、作業場、作業施設、橋などの構造物のほとんどを自分たちでつくっている。

水は井戸水を利用していましたが、規模が大きくなるに従い、上水道をひくこととなった。「新得共働学舎」では米と魚以外の食料は基本的に自給している。

女性用の宿舍は、「新得共働学舎」のある亡くなったメンバーの母親の寄付により建設された。



「さくら」



「笹ゆき」



「ラクレット」

図12. 表彰されたチーズ3種

また、「新得共働学舎」で永住を決めた障がい等の問題を抱えたメンバー4名が出資して2,800万円で共同住宅を建設した。なお、建物は建築の得意なメンバーが中心になり建てた。宮嶋氏は、この共同住宅の建設にあたり、これからはメンバーの老後についても責任を持たなければならないことを自覚したとのことである。

2週間に一度、町の訪問看護事業所で働く看護師に、ボランティアでメンバーの健康チェック(血圧・問診)をお願いしている。

毎週日曜の夜は食堂へ自主的に集い、メンバーにそれぞれの考えていることを話してもらっている。自分のこれまでの境遇で



図13. 寄付で建てられた女性用寄宿舍



図14. 共同出資し、自分たちで建てた共同住宅

あったり、悩みであったり、感じていることなど何でも話すことができる場となっている。この機会がお互いを知る、信頼関係をつくることに繋がっているとのことである。

4. 「新得共働学舎」へやって来る人々

(1) 「安心感」

「新得共働学舎」にやって来るきっかけの多くが口コミであり、テレビや雑誌等に紹介されるようになってからは、メディアを媒介としての問い合わせが増えた。

すでにほぼ満員状態であるが、問い合わせがあれば、1週間限定ではあるが必ず体験を受け入れている。

体験者の多くは、普段の生活において、自宅では個室が与えられ、テレビやパソコンもあり、家事も家族や福祉施設スタッフ

にしてもらっている。しかし、「新得共働学舎」へ来ると30年近く前に建てられた木造の共同宿舎に寝泊まりすることとなる。それでも、3日も共同生活をすると、「家には帰りたくない。ここにもっといたい。」という気持ちになるとのことである。宮嶋氏によれば、「安心感」がここにはあるからだという。そして、自分と同じ境遇、自分よりも心も体ももっと厳しい状況にある者たちが、一生懸命に働き、生活している姿を見ることで自分を見直すことにつながっているのだという。

ここでは「安心感」を持ち、自分の可能性を確認できるといえるであろう。

(2) 「社会に認めてもらいたい」

宮嶋氏は、人間はみな自分の存在を社会から認めてもらいたい、いわゆる「存在証明」というものに依拠していると感じている。これは心と体の問題を抱える者、そして自分自身もそうだとすることを、自らの人生経験の中で実体験してきたとのことである。多くの問題を抱え、「新得共働学舎」にやって来るほとんどの人々が「存在証明」を求めているとのことである。

つまり、人間は誰もが自分の価値、存在を社会の中で認めてもらいたい。自閉症やニートや引きこもりと呼ばれる人々も同様であり、その場をどのように社会がつくり、受け入れていくかが、今、我々に問われているのであろう。

(3) 「世話をする人、世話をされる人とは分けない」

「新得共働学舎」では、世話をする人、世話をされる人には分けない。それぞれが自分でやりたいこと、できることをやり、他の人ができなければ誰かが支援し協力す

るとのことである。

つまり、ここには本来の「助けあい」、「共働」の精神がある。私たちは日常の中で、障がいをもった人々、高齢者、子供は「世話をしてあげる」存在として認識しているのではないであろうか。本来なら一個の人間として認識しなければならないであろう。

5. 「新得共働学舎」に来て変わった人々

「新得共働学舎」へやって来た人々は、最初、どうしたらよいのか戸惑うということである。それは「何をしてください」ということがないためである。一般的な福祉施設では1日の生活スケジュールや仕事内容も、本人や家族とも話し合うが、事業所の側で決めることが多い。しかし、「新得共働学舎」では、毎日、「今日は何をしたいのか」ということだけを聞く。

やって来た人々の多くは、まずはやりやすい、みんなのご飯づくりの手伝いや片付けから始めるとのことである。その後、クッキーやケーキづくり、そして農作業に従事したいという気持ちが徐々に芽生えるようになる。そこで、その作業を実際に体験してもらいながら、本当にできるのかどうか、本当にやりたいのかどうか自分で判断・納得してもらうこととしている。

それまで家事もやったことのない者が、家事を手伝い、仕事をするようになる。自分のいる場があり、自分の役割が見つかることで、心も体も大きく変化していくとのことである。

6. 雇用等

(1) 仕事の配置

NPOには収益事業についての制約があることから、農事組合法人への派遣という雇用形態をとっている。

仕事内容については、前述したように本人のやりたいことをしてもらうことにしている。

ただし、仕事についてもそれぞれの役割についての責任を負うことが前提であることから、例えば、牛の世話ならそれを世話をしている者全員で、混乱のないよう、迷惑がかからないように作業内容を調整する。

最初に担当や流れが決まるまでは時間もかかるが、本人とまわりの者が議論をし試行錯誤のプロセスを重ねることで、仕事に従事したいかどうか、できるかどうか自然と決まっていくとのことである。

また、そのような過程においてリーダーの役割を果たす者も必ず現れ、生活も含め組織の中でのそれぞれの役割が自然と決まっていくとのことである。

(2) 社会保障、賃金、所得

雇用保険については、NPOから農事組合法人へ派遣される者には全員適用している。

賃金については、心と体の問題を抱える者については、多い者で6万円程度、少ない者でも3万円程度（訓練をしている場合は1万5千円程度）を毎月支払っている。これに、障害者年金を受給している者についてはさらに年金3～8万円が上乗せされる。他の職員スタッフ・パートについては5～15万円程度となっている。入居者は、この中から居住費・光熱費・食費等として毎月1万円をNPOへ支払う。

労災については農事組合法人で加入している。

7. 人間が生きるということ

(1) 「障がいとは」

前述したように「新得共働学舎」では「障がい者」「健常者」という区分けはない。一

個の人間として捉えている。「健常者」と呼ばれる人々にも得意不得意がある。つまり、人間の個性として「障がい」を位置づけている。

個性という言葉は多くの福祉関係者や家族などが用いている。しかし、本当にそれを実際の日常の中で実践している人々はまだまだ多くはないのではなかろうか。「優しさ」「親切」「親心」「慈悲」などが判断・行動を難しくしていると考えられる。宮嶋氏ら職員、パート、ボランティアは一個の人間として、時には自分の弱い部分・未熟なところをさらけ出し、そして様々な問題を抱える人々を一個の人間・社会の一員として接し、育てている。頭では理解できていても、福祉関係者等を含め我々が、今日の取り巻く社会や環境の中で実践することはとても難しいのではないだろうか。

(2) 「生きがいとは」

ここでの「生きがい」は、自分のいる場があることを前提とし、さらに自分の「やりたいこと」＝「役割」が認められ、実現できていることといえよう。

昨年の我が国の自殺者は3万人を超えており、今の世の中は生きにくい、あるいは生きがいを感じる事が難しい、自分ではどうにもできない社会・地域・家庭におかれているなどその原因はさまざまであるが、「新得共働学舎」をみると、自分より大変な人がいることを知る機会が少ないといったことなども大きな要因の一つになっているように考えられる。

「新得共働学舎」は社会の中に行き場を失った人々が再生していく場となっている。一人一人を否定せず、良い面ややりたいことを引き出す努力を絶えず続けている。やって来る多くの人々が、その中で、

自分の価値・役割を発見しているといえよう。

8. 農の効果と可能性

宮嶋氏によれば、農業にはいろいろな人々を受け入れる包容力があるとのことである。

これは、これまで筆者が『共済総研レポート』の中で論じてきた「農の福祉力」によるものといえるであろう。他の施設・法人へのヒアリング調査の中では、障がい者への効果として、一定の効果が認められているが、「共働学舎」にみるようにニートや引きこもりにとっても有効と考えられる^{注5)}。

農には産業としてだけでなく、「教育」「癒し」「健康づくり」「レクリエーション」としての様々な可能性がここでも見出される。

注5) 『共済総研レポート』No.89、91、92、99、100、101掲載の濱田稿を参照。

9. 自分の弱みを自覚できるか

これまで自分をいわゆる「健常者」と認識し、「障がい者」に対して世話をしあげよう、協力してあげようという者が「新得共働学舎」へやって来たとのことである。しかし、そうした者の多くはすぐに出て行く。特に、有資格者や知識人や立場のある者にその傾向が強いということであった。

それは、自分はできると思いやって来て、ここで実践しようとするが、実際はほとんど何もできないためである。特に、人を動かすことができないことを痛感するためである。自分の弱さ、未熟さを知り、認めることができなければ、ここで共に生活したり、受け入れてもらうことはできない。

ここでは、「嘘をつく」、「人を利用する」、「人より自分は優れている」、「自分の失敗を隠そうとする」、「高い地位や名声を得よう」と

する」といった自分の弱みを見せなくする行為は、メンバーに感じとられてしまう。

つまり、資格や地位や名声などを脱ぎ捨て、一個の人間としてメンバーと向き合うことができなければ、「新得共働学舎」のメンバーに働きかけることはできないということである。これは、本来、すべての人々が家族、学校、会社等において、そうでなければならぬのではないであろうか。

21世紀の大きな時代の転換期にある今、「新得共働学舎」のメンバーから学ぶべき多くのことがあるのではないであろうか。

10. 「新得共働学舎」がいらなくなる日

宮嶋氏と共に「新得共働学舎」を支えてきた奥様が「私は世の中から学舎がいらなくなっただけだ」と語った。

「新得共働学舎」は、社会の中で犯罪を犯したり、行き場のない者、最も弱いとされる者、つまり社会から排除された（ソーシャルエクスクルージョン）最も厳しい状況にある人々を受け入れている。こうした場がなくなることは、多様な価値や多様な個性を持った人々が、受け入れられる社会になっているということである。

それは「障がい者」、そして「福祉」という言葉が消えることを意味する。社会のあり方をもう一度再考することが、今、求められている。

自然は、草も木も昆虫も魚も鳥も動物も土壌菌もそれぞれが「いのち」としての役割を果たし生きている。

人間も自然の中では生態系の中の一つであり、人間社会もいろいろな者がそれぞれ役割を与えられている。これまで社会の中心となってきたお金（資本）という一つの価値観ではなく、もっと多様な価値や役割があることをお互いが認め合うことが必要なのではない

であろうか。

障がいをもった方、認知症の方、それぞれが私たちに投げかけているものがある。それは彼らを一個の人間、対等の役割を持つ「いのち」として受け入れることである。彼らの存在を前向きに捉えることができたとき、社会は大きく変わるのかもしれない。一人一人が家庭、職場、学校、集まり、地域等の中で実践していくことが重要となる。

11. 今後の取組みについて

最後に、「新得共働学舎」の課題としてあげられるものを列挙する。

一つは宮嶋氏の後継者の育成である。

二つには高齢化するメンバーへの対応があげられる。

後継者はメンバー全員の合議で決められていくことが望まれる。また、高齢化への対応としては行政や地域のNPOや介護保険事業者等と連携をはかり、地域で「共働」していくことが重要になるであろう。

「新得共働学舎」が21世紀の社会を導き照らす一つの光となることを期待して本稿の結びとしたい。